



三島由紀夫が描いた鎌倉の風景

児童学部子ども心理学科を卒業した迂回^{うかい}ひなたさんの作品『梅咲く頃にまた会おう』（講談社）が「第19回小説現代長編新人賞選考委員特別賞」を受賞し、迂回さんが過日ご本をもって挨拶にきて下さいました。童話の世界でも『びょうき銀行にあずけちゃえ』（ポプラ社）で一昨年「第1回角野栄子あたらしい童話大賞」を受賞されたそうです。「死んだはずの初恋の人」との、現実では心の中にたゆたうだけのあえかな交流を息遣いも含めて細やかな描写と巧みなアイディアで可視化した、恐らく若い今でしか書けないであろう仕合せな作品を物になさいました。

私にも文学に憧れた時代がありました。殊に高校時代の半ば頃からは遠藤周作の、大学に入ってから三島由紀夫の作品に強く魅^ひかれるようになりました。遠藤さんのキリスト教的宗教観を背景に置いた『沈黙』や『哀歌』、『さらば、夏の光りよ』や『わたしが・棄てた・女』は、若い私の心を打ちましたし、三島さんの絢爛豪華な文章と精緻な論理によって編まれた小説や戯曲にはただただ感嘆するばかりでした。当時両氏の盛んな創作活動は現在進行形でしたので、掲載が待ちきれなかったほどです。そして今、私が文学に求めるものは、あくまでも物語性と言葉の表現です。思想ならば、哲学でいい。ですから、卒業生がこんな小説を書いたのかと、この度の迂回さんの慶事はとても嬉しく、かつて私にも小説を書いていたかと思つた時期があつたことを久しぶりに思い出し、没後直ちに刊行された書棚の『三島由紀夫全集』を取り出した次第です。それこそ、色々なことを語りたくなるわけですが、ここでは三島由紀夫が描いた鎌倉の風景を1、2紹介するだけに止めましょう。

〈一つは、長谷、現在の「鎌倉文学館」からの風景、季節は真夏、物語の設定は大正時代〉

青葉に包まれた迂路を登りつくしたところに、別荘の大きな石組の門があらはれる。王摩詰の詩の題をとつて號した「終南別業」といふ字が門柱に刻まれてゐる。

.....

南面するテラスからは、正面に大島がはるかに見え、噴火の火は夜空の遠い篝になつた。由比ヶ濱までは庭づたひに五、六分で歩いてゆける。.....

.....

夏の日のこの風光の壮麗は、比べるものとてなかつた。谷^{やつ}が扇なりにひらけてゐるので、右方の稲村ヶ崎、左方の飯島は、あたかも庭の東西の山の尾根からぢかにつづいてゐるやうに眺められ、空も地も、二つの岬に囲まれた海も、.....そこを犯すものは、ほしいままにひろがる雲の影と、たまさかの鳥影と、沖をゆく小さな船

影とだけであつた。

『豊饒の海』第一巻『春の雪』から —『三島由紀夫全集』第一八巻（新潮社）—

〈もう一つは、北鎌倉建長寺の裏山^{しょうじょうがたけ}勝上ヶ嶽^{いただき}の頂からの風景、季節は晩夏、物語の設定は鎌倉時代〉

鎌倉の山や谷の起伏のむかうに、遠く一線をなして燦めいていゐる海である。夏のあひだには、稲村ヶ崎あたりの海に日が沈むのがここから見える。

水平線の濃紺が空に接するところに、低くつらなつた積雲がわだかまつてゐる。それは動かないが、夕顔の花弁がほぐれるやうに、實はごく静かにほぐれて、形をすこしづつ變へてゐるのである。その上にはやや色褪せたよく晴れた青空があり、雲はまだ色づくには早い、内部からの光りで、ほんのりと杏子^{あんず}いろの影を刷いてゐる。

空は丁度夏と秋とが争ひ合つてゐるけしきである。何故かといふと、水平線からはるかに高い空には、横ざまに、鰯雲がひろがつてゐるのである。鰯雲は鎌倉のかずかずの谷^{やつ}の上に、柔らかなこまかい雲の斑を敷き並べてゐる。

「おお、まるで羊の群のやうだ」

『海と夕焼け』から —『三島由紀夫全集』第九巻（新潮社）—

海あり、山あり、四季折々の自然に恵まれた鎌倉、たまには授業を抜け出して、鎌倉の風景を味わうのもまた一興かも。いや、そんなことを言つては、折角の先生方から叱られる。物語は双方夏の風景の描写でもあり、やっぱり夏休みにでも行つた方が学生諸君にとつても筆者にとつても無難というものでしょう。

何れにしても、ここ大船キャンパスは、新田義貞の海からの道と北鎌倉の切通し、それと朝比奈峠の3つの隘路^{あいろ}の他、峻^{けわ}しい山で囲まれた鎌倉旧市には入り過ぎず、そうかと言って離れ過ぎず絶妙な距離にある最高の教育環境だと思います。

※引用文に旧漢字や旧仮名遣い等が多用されていますが、文体、様式、文字遣い他、細部まで修辭を凝らした文学作品であることから、振り仮名を付加することや新漢字にあらためること等は控えました。

[>前のページへ戻る](#)